

馬の発育の調査から — 急激な発育とDOD —

DODの発症については、マンスリーレポートの18から25で触れてきましたが、その発症の要因の一つとして、仔馬の急な発育が挙げられています。そして栄養学の研究者が、炭水化物の多給がいけないとか、それに代わるエネルギー源として、脂肪分ならその弊害は避けられるのでは、といった研究もしています。

今回は、DODを発症し獣医師が何らかの診療をした情報のある馬と、今までの成長を追ったデータのある馬とで、たまたま同一馬であった例が何頭かいたので紹介します。

図-1は、関節内に骨片等を見つけた馬の体重の変化です。

飛節でしばしば見つける骨片の多くは「骨軟骨症」で、「飛節軟腫」の症状があれば、関節鏡で摘出手術を実施します。飛節の「関節鏡手術」を実施した馬5頭の体重の変化を示しましたが、そのほとんどが、生後1年くらいまでは、平均を超える体重の変化を示していました。

球節に見られる骨片については、「骨軟骨症」ではなく「骨折」と考えられている症例もあります。ここで示した3例は、関節鏡手術を実施した馬ですが、レントゲン像等の詳細は分かりません。その中の1頭だけが平均を超える体重の変化を示しました。

若馬の後膝で見られる骨の異常としては、「骨軟骨症」の他に、「骨嚢胞」もありますが、ここで示した3頭のうち2頭は「骨嚢胞」でした。体重の変化は、平均を下回る例もありました。

図-1 関節各部位のDODを発症した馬の体重の変化

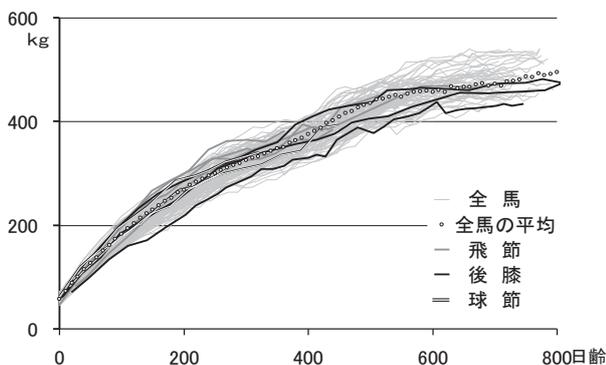
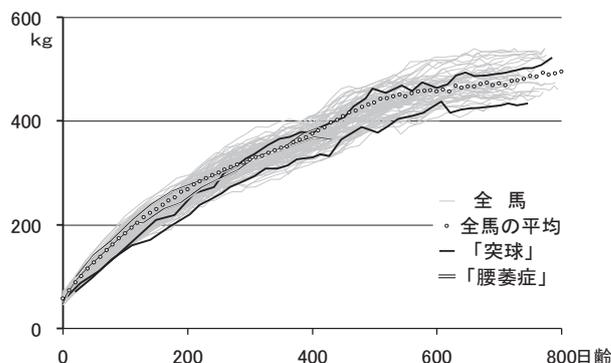


図-2は、DODに類する疾病である、「腰萎症」と「突球」を発症した馬の体重変化です。

「腰萎症」は、脊髄神経が圧迫されて起こる疾病ですが、その圧迫の原因が「骨端症」によることから、DODに分類されています。この図には2頭の例を示しましたが、その体重の変化は、ほぼ平均的なものでした。

「突球」の例は2頭示しましたが、1頭は平均的な体重の変化をかなり下回るものでした。しかし、もう1頭は、当歳秋くらいまではけっして成長の早い馬ではありませんでしたが、冬を迎えるころから急に大きくなり、「骨端症」が気になりだし、1歳夏ころには繋ぎが起立してきたそうです。

図-2 「腰萎症」、「突球」を発症した馬の体重の変化



ここで示した例は、手術等の診療を実施した情報をたまたま得られた例ですが、「骨端症」や、繋ぎの起立などは、軽いうちは獣医師にも診させない場合も多いことでしょう。成長の調査をした馬のすべてを、レントゲン撮影など、詳細な情報を集めれば、DODと発育との関係についての確かな分析ができたかもしれません。急成長や過肥はDODの要因の一つと言われていますが、本当にそうなのか、どの時期に急成長、過肥があるかどうかのようなDODになるのか、さらに多くの詳細な情報を集めて、分析しなくてはならないと思います。

DODの発症について示した時も触れましたが、DODの発症は、飼養管理技術のバロメータです。仔馬の成長の記録に併せて、「骨端症」や飛節の腫れ、繋ぎの起立など、DODが疑われるどんな些細な現象についても、重要な情報として監視し記録しておくことが重要です。

【過去のマンスリーレポートの記事は、JBBAのホームページからも閲覧することができます。】

<http://www.jbba.jp/center/monthlyreport.html>